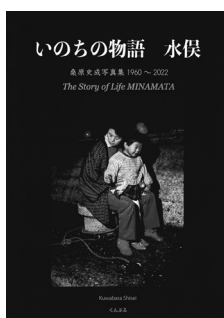


書評



桑原史成著

『いのちの物語 水俣
桑原史成写真集1960～2022』

くんぶる、2022年10月

評者 芥川 仁

写真家

水俣病事件を取材した桑原史成の写真集は、私の手元に7冊。その最新刊が「いのちの物語 水俣」だ。最初のページを捲ると見開きでカラーの集合写真がある。写真に登場するのは被害者の闘いの先頭に立ち、桑原史成写真集では馴染みの被害者たちだ。それぞれの手には患者自ら、又は、その家族が写された大きいモノクロ写真を持っている。キャプションに「1960年に撮影を開始して50年目の公式確認日に水俣湾埋立地で集合写真を撮った。2010年5月1日」とある。撮影者である桑原史成は、水俣病事件50年の歴史と自らの仕事50年をこの一枚の集合写真で表現したのだ。一つの事件を半世紀以上も取材し続ける写真家は多くはない。なぜなら写真家の現役寿命が半世紀を超えることが稀であることと、一つの事件が半世紀を超えても尚、社会へ問題提起を発し続けることが稀であるからだ。つまり、この写真集「いのちの物語 水俣」は、写真家桑原史成と水俣病事件の稀なる60年間に及ぶ関係性によって成り立つ物語なのである。

第一章は公式確認患者第一号となった田中実子さんが6歳の時から始まる。10年後は娘になり、20年後には自宅でくつろぐ両親に笑顔を見せる実子さんの姿がある。両親はその後他界され、田中家の長女綾子さんが自宅前の船着き場で晴れ着姿の実子さんを世話する1986年の写真が最後になっている。現在の実子さんは古稀を過ぎ、水俣市内の自宅で義兄の世話を受けて暮らしているが、寝たきりで24時間の介護を必要としている。

田中実子さんが登場する写真の右肩に「実子」と大きめの白抜き文字が入っている。この文字に編集者である久保田好生と白木喜一郎が被害者に寄せる親近感が現れていると感じた。編集を担当した2人も又、50年以上水俣病事件の被害者と付き合いしてきた支援者である。「実子」と呼ぶことで、被害者と支援者の距離が一気に縮まる。その愛おしさを込めた距離感が編集作業の中で無意識に表出したのだろう。

第一章では田中実子さんの他に、胎児性、小児性患者たちが幼い頃から成長していく姿を辿ることができる。60年間継続して取材してきた桑原史成の真骨頂だ。そして、ここでも、支援者である編集者2人が「若い患者」と言われる世代の被害者に向ける親しみの感情が家

庭アルバムを捲るように伝わってくる。幼い患者たちの姿が何しろ愛おしい。

桑原史成が水俣を初めて訪ねた1960年は、水俣病が公式に確認され病因物質がメチル水銀であることは判明していたが、まだ「奇病」と言われた時代。チッソ水俣工場の廃液が原因と認められるのは1968年9月になってからだ。第二章「海と病床」では、奇病によって激変し困窮する海辺の暮らしや水俣市立病院に入院している重篤な患者の病状が伝えられる。特に病院の廊下で発作を起こしている川上タマノさんや船場岩蔵さんの変形した手、松永久美子さんの瞳など、桑原史成でなければ撮影できなかった健康被害の重篤さを象徴的な写真によって印象深く伝えている。後になって私たちが水俣病事件の被害を思い浮かべる時、この時代に撮影された桑原史成の写真が大きく影響を与えていることが分かる。

この後の章に「チッソ水俣工場」があり、続いて『『苦海浄土』と石牟礼道子さん』の章が続く。ここでも編集者の作家石牟礼道子に対する敬愛の情が「さん」付けに滲んでいる。多くの読者が影響を受けた「苦海浄土」の登場人物と思われる実在の被害者が1960年撮影の桑原史成の写真によって登場する。しかし、私は微妙な違和感を感じた。作者が「苦海浄土はノンフィクションではない」と語っていることを前提とすれば、実在の被害者を登場人物に当てはめるのは行き過ぎではないだろうか。もう一点、これまで見る度に不思議に思っていた写真がある。資料編冒頭の「彼岸の団欒を垣間見る」で石牟礼道子さんが触れている半永一光さんが幼い頃の家族が横になっている写真だ。家族が並んで就寝している場面を他所者である桑原史成が押し掛けて撮影したとは思えないし、この写真の半永一家には石牟礼道子さんが書いているようにどこか和やかな雰囲気が漂っている。キャプションにある「家族は寝転んでみせてくれた」を読んで状況を理解できた。撮影は桑原史成が水俣の取材を始めてまだ日の浅い頃だ。彼の正直な人柄と熱意、それと小さな漁村で暮らす人びとの誠実さが撮らせた写真だったのだと理解できた。

水俣を題材にした桑原史成の写真集は告発的な内容が多い中で「いのちの物語」は編集者の意図が強く反映し、事実の過酷さを伝えながらも被害者への愛おしさが漂う写真集となっている。「あとがき」によると水俣病事件を知らない若い世代へ向けて企画されたとある。2024年5月1日に開催された環境大臣と被害者団体の意見交換会での「マイク切り事件」に象徴されるように、行政の水俣病切り捨て策は顕在化している。この写真集が新たに「水俣」と出会う若い世代の一助となることを切に願う。